

「学校と社会をつなぐ調査」 最終成果報告書

2022年8月

溝上 慎一・学校法人河合塾（編集）

報告書で示す主な結果と示唆

「学校と社会をつなぐ調査」（通称：10年トランジション調査）は、2013年に京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾が共催で開始した、高校生を対象に10年間追跡調査するものです。全国378校の高校2年生45,311名が調査に参加し、この度の最終調査に1,486名の社会人が参加しました。10年トランジション調査は、調査の企画・分析者の溝上慎一が学校法人桐蔭学園へ移ったことで、2018年9月より溝上と河合塾との共同で継続して実施しています。

本書は、高校生、大学生の学習やキャリア、資質・能力等が大学卒業後社会人3年目にかけてどのように変化し、影響を及ぼすのかを示す、本プロジェクトの最終成果報告書です。主な結果は以下の通りです。

- ・ 高校2年生から社会人3年目にかけて、クラス（高中低）内での変化は統計的に認められるものの、クラス間を移動する変化（たとえば中クラスから高クラスへ）は統計的には認められない。高校2年生から社会人3年目にかけての資質・能力の安定性を示唆することができる。
（→詳しくは分析2を参照）
- ・ 資質・能力は、高中低いすれのクラスにおいても、社会人3年目になって得点が大きく落ちていた。高校2年生～大学4年生まで上昇してきた同得点が社会人になってなぜ大きく落ちたのかは今後の課題である。（→詳しくは分析2を参照）
- ・ 高校時の日々の過ごし方（生徒タイプ）や大学時のキャリア意識（二つのライフ）が社会人の「組織社会化」「能力向上」「資質能力」と関連することは認められたが、「社会経済的地位」「入学した大学の偏差値」の属性要因とは関連していなかった。（→詳しくは分析3を参照）
- ・ 大学1年生、3年生の「AL外化」は、二つのライフや主体的な学習態度と関連し合いながら、直接的に社会人3年目における「組織社会化」「能力向上」「資質能力」に影響を及ぼしていた。
（→詳しくは分析4を参照）
- ・ 概して、大学1年生から3年生にかけて学びやキャリア等は変わりにくいことが明らかになったが、その中でも、授業外学習時間や二つのライフ、AL外化など、変化しやすい変数のあることも明らかとなった。それらは、学生を学び育てる実践的な視点になると考えられた。
- ・ 高校2年生の学びやキャリア等の変数が、社会人3年目に直接的に大きく影響するという結果は見られなかった。このことは、高校から大学への移行期、その後大学生になってからの前半期、後半期といったような、節目節目の時期の学びやキャリア等に関する態度や意識の再構築、すなわち間接効果を積み重ねていくことが実践的な教育や指導への示唆になると考えられた。

2020年に小学校から施行され始めた新学習指導要領では、資質・能力の三つの柱（知識・技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）が提起されています。Society 5.0やAIやIoTなどの技術革新、社会のさまざまな変化に適応して、解決すべき社会の問題に取り組んで人生を力強く歩んでいくための生徒学生の資質・能力の育成が謳われています。

本調査の結果が示したのは、そのような資質・能力を高中低という大きく3つのクラスに分けて見た時、高校2年生から社会人3年目までそのクラス移動が統計的に起こらないということでした。また、このことは、実質的な義務教育段階となっている高校までの間に、ある程度児童・生徒の資質・能力を育てなければならないことを示唆します。大学受験を乗り越えて志望する大学へ入学しても、高校までの間に議論をしない、協働をしない、新しい経験に開かれていないなどの、資質・能力を十分に身につけてこなかった生徒は、大学生になっても社会人になってもそれらの資質・能力を十分に発展させられない可能性が高いということです。資質・能力はいつでも好きな時に発展させられるものではなく、幼少時より積み上げてきた知識や能力、経験等を基礎として間接効果として発展させるものなのです。

もちろん、クラス移動するほどに人は資質・能力を変化させられないとしても、そのことが人は「まったく成長しない」「変化しない」ことを意味するわけではありません。同じクラス（たとえば高クラス、中クラス）の中での資質・能力の得点の上昇は統計的にも認められます。また、資質・能力の発達に関わるさまざまな活動（学習や人間関係、クラブ・サークル、アルバイトなど）における質的な肯定的変化・拡がりまで加えて考えれば、学生は「成長する」と見ることはできます。大化けを期待することは難しくても、学生は「成長」することはできるのです。

これほどの大規模で、高校生から社会人までの学習やキャリア、資質・能力等を縦断的に繋いだパネル調査は、日本では皆無に等しく、近年の高大接続、学校から仕事・社会へのトランジション（移行）の改革の中で貴重な資料になると思います。今後、他の大規模サンプルや他の項目から調査研究が行われ、本調査の結果が検証・修正されていくことを期待しています。

最後に、高校2年生から約10年間、この調査に参加してくれたすべての参加者に心よりお礼を申し上げます。本報告書が、学術的・教育実践的な基礎資料として、これからの日本の学校教育の発展に役立つことを願っています。

2022年8月 溝上 慎一

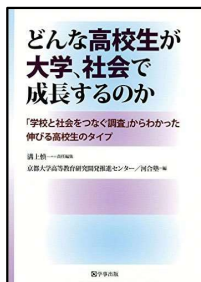
目次

・ 報告書で示す主な結果と示唆	2
・ 調査概要	5
・ これまでの調査と分析対象者について	6
・ 社会人3年目調査への参加者属性	7
・ 分析1：相関分析	9
・ 分析2：高校2年生から社会人3年目にかけて資質・能力は変化するか	10
・ 分析3：属性変数（社会経済的地位や高校の大学進学程度など）との関連	12
・ 分析4：高校・大学時の学習・生活・キャリア等が社会人に及ぼす影響	17
付録 使用変数の説明	21

調査概要

京都大学高等教育研究開発推進センターと学校法人河合塾は、2013年から高校2年生（全国約400校、4.5万人が参加）を、大学生・社会人へと約10年間追跡調査する「学校と社会をつなぐ調査」（通称、10年トランジション調査）を実施してきました。高校生、大学生の学習や生活、キャリア意識等の学びと成長が、社会人にどのように影響を及ぼしているかを調べる調査です。調査は、調査企画・分析者の溝上慎一が桐蔭学園へ移動したことで、2018年より溝上と河合塾との共同で継続して実施しています。

高校2年生、大学1年生の調査時の詳しい報告は下記の2冊の本に、報告書や最新の案内は河合塾ウェブサイトにもまとめられています。



溝上 慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）
（2015）. どんな高校生が大学、社会で成長するのか―「学校と社会をつなぐ調査」からわかった伸びる高校生のタイプ― 学事出版



溝上 慎一（責任編集）京都大学高等教育研究開発推進センター・河合塾（編）
（2018）. 高大接続の本質―「学校と社会をつなぐ調査」から見えてきた課題― 学事出版



河合塾グループサイト「学校と社会をつなぐ調査 | 教育研究開発活動」
<https://www.kawaijuku.jp/jp/research/sch/>

2013年時に高校2年生だった参加者の中で、現役で大学に進学し、卒業して就職した人は2021年度に社会人3年目となりました。本最終成果報告書は、この参加者を対象に、2021年12月に調査を行った結果をまとめたものです。高校2年生からの変化や関連の分析を通して、新学習指導要領で大きく提起された資質・能力が、高校2年生から社会人3年目にかけてどの程度変化するのか、高校・大学時の学習や生活、キャリア意識、属性等が社会人における評価指標（本調査では「組織社会化」「能力向上」「資質能力」を測定）にどのように関連、影響を及ぼすのかを明らかにします。

なお断りがなければ、分析にはIBM SPSS Statistics、AMOS Version 25.0を使用しています。

これまでの調査と分析対象者について

- **高校2年生調査（高2）**

2013年10～12月実施。全国計378校の高校2年生45,311名（男性21,238名、女性22,588名、不明1,485名）が教室で、あるいはインターネットで調査票に回答。メールアドレスをインターネットで登録し、継続調査を承諾した16,829名（回答者の37.1%）が、以後の継続調査の対象者となる。

- **高校卒業時調査**

2015年4月末にインターネットで実施。7,420名（男性2,951名、女性4,469名。継続調査を承諾した人の44.1%）が回答。調査内容は、高校2年生調査で尋ねられなかった項目（高校在籍時の居住都市、親の職業や学歴、年収等の社会階層情報）や卒業後の進路・就職状況など。

- **大学1年生調査（大1）**

2015年11-12月にインターネットで実施。5,939名（高校2年生調査で継続調査を承諾した人の35.3%）が回答。そのうち、4年制（あるいは6年制）大学へ進学した4,751名を分析の対象とした。ただし、同一数字を続けて回答するなどいい加減だと見なされる回答者74名を除いたので、最終的には4,677名（男性1,792名、女性2,850名、その他35名）が分析対象者である。

- **大学2年生調査（大2）**

2016年11-12月にインターネットで実施。分析対象者は、大学1年生調査で4年制（あるいは6年制）の大学へ現役で進学しており、調査に回答した3,586名（男性1,335名、女性2,226名、その他25名）である。高校2年生調査で継続調査を承諾した人の21.3%に相当する。

- **大学3年生調査（大3）：**

2017年11-12月にインターネットで実施。分析対象者は、大学1年生調査で4年制（あるいは6年制）の大学へ現役で進学しており、調査に回答した3,239名（男性1,206名、女性2,014名、その他19名）である。高校2年生調査で継続調査を承諾した人の19.2%に相当する。

- **大学4年生調査（大4）：**

2018年11-12月にインターネットで実施。分析対象者は、大学1年生調査で4年制（あるいは6年制）の大学へ現役で進学しており、調査に回答した2,742名（男性996名、女性1,731名、その他15名）である。高校2年生調査で継続調査を承諾した人の16.3%に相当する。

- **社会人3年目調査（社3）：**

2021年12月にインターネットで実施。調査は、大学1年生調査で4年制の大学へ現役で進学し、卒業したと見なされる人（調査目的を簡潔化して検討するため、6年制学部の大学へ所属していた人、大学院に進学した人は調査対象から除外した）を対象とし、回答者は1,486名（男性442名、女性1,037名、その他7名）である。高校2年生調査で継続調査を承諾した人の8.8%に相当する。分析はこの中から、「大学を卒業して、就職・仕事をしている（フリーランス、アルバイトを含む）」2～3年目の社会人1,457名（内訳はp.7で示す）を抽出して行った。

社会人3年目調査への参加者属性

＜現在の就学・就職状況＞

	男性	女性	全体
4年制（あるいは6年制）大学に在籍	0(0.0)	1(0.1)	1(0.1)
短期大学に在籍	0(0.0)	1(0.1)	1(0.1)
専門学校に在籍	1(0.2)	1(0.1)	2(0.1)
浪人・再受験の準備をしている	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
大学を卒業して、就職・仕事をしている（フリーランス、アルバイトを含む）	436(98.6)	1,023(98.6)	1,466(98.7)
大学を卒業して、就職準備中である	3(0.7)	5(0.5)	8(0.5)
何もしていない	1(0.2)	3(0.3)	4(0.3)
その他（具体的にお答えください）	1(0.2)	3(0.3)	4(0.3)
計	442(100.0)	1,037(100.0)	1,486(100.0)

（注）性別の未回答者、不明者がいるので、男女の合計は1,486名にはならない。以下同様である。

＜現在仕事をしている人：大学卒業後の年数＞

	男性	女性	全体
1年目（2021年3月卒業）	4(0.9)	1(0.1)	5(0.3)
2年目（2020年3月卒業）（2020年9月卒業も含む）	61(14.0)	89(8.7)	152(10.4)
3年目（2019年3月卒業）（2019年9月卒業も含む）	370(84.9)	930(91.1)	1,305(89.0)
4年目以上	1(0.2)	1(0.1)	2(0.1)
未回答	不明	不明	2(0.1)
計	436(100.0)	1,021(100.0)	1,466(100.0)

（注）上の質問で“大学を卒業して、就職・仕事をしている（フリーランス、アルバイトを含む）”と回答した人を抽出している。

＜現在仕事をしている人：仕事の業種＞

	男性	女性	全体
農林漁業	0(0.0)	2(0.2)	2(0.1)
鉱業	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
建設業	16(3.7)	21(2.1)	37(2.5)
製造業	51(11.8)	95(9.3)	146(10.0)
電気・ガス・熱供給・水道業	1(0.2)	6(0.6)	8(0.5)
情報通信業	71(16.5)	112(11.0)	184(12.6)
運輸業、郵便業	22(5.1)	28(2.7)	50(3.4)
卸売業、小売業	18(4.2)	65(6.4)	83(5.7)
金融・保険業	33(7.7)	78(7.7)	111(7.6)
不動産業、物品賃貸業	4(0.9)	18(1.8)	22(1.5)
飲食・宿泊業	2(0.5)	10(1.0)	12(0.8)
医療・福祉	12(2.8)	157(15.4)	169(11.6)
教育・学習支援	35(8.1)	84(8.2)	119(8.2)
学術研究、専門・技術サービス業	8(1.9)	29(2.8)	37(2.5)
その他サービス業	25(5.8)	71(7.0)	96(6.6)
公務（員）	68(15.8)	144(14.1)	214(14.7)
その他	4(0.9)	10(1.0)	15(1.0)
未回答	61(14.2)	89(8.7)	152(10.4)
計	431(100.0)	1,019(100.0)	1,457(100.0)

＜現在仕事をしている人:仕事の職種＞

	男性	女性	全体
研究・技術職	99(23.0)	232(22.8)	332(22.8)
経理・財務関係事務職	23(5.3)	25(2.5)	48(3.3)
企画・総務・広報関係事務職	36(8.4)	81(7.9)	117(8.0)
人事・労務関係事務職	7(1.6)	29(2.8)	37(2.5)
営業・購買・販売職	96(22.3)	165(16.2)	261(17.9)
一般事務職	63(14.6)	189(18.5)	254(17.4)
その他	46(10.7)	209(20.5)	256(17.6)
未回答	61(14.2)	89(8.7)	152(10.4)
計	431(100.0)	1,019(100.0)	1,457(100.0)

＜現在仕事をしている人:正規・非正規＞

	男性	女性	全体
正規の職員・従業員	353(81.9)	870(85.4)	1,226(84.1)
非正規（パート・アルバイト・派遣社員・契約社員・嘱託等）の職員・従業員	14(3.2)	55(5.4)	71(4.9)
その他	3(0.7)	5(0.5)	8(0.5)
未回答	61(14.2)	89(8.7)	152(10.4)
計	431(100.0)	1,019(100.0)	1,457(100.0)

＜現在仕事をしている人:役職＞

	男性	女性	全体
一般の職員・従業員	345(80.0)	895(87.8)	1,243(95.2)
係長・主任・班長などのポジション	20(4.6)	20(2.0)	41(3.1)
課長・マネージャー・課長補佐などのポジション	1(0.2)	8(0.8)	10(0.8)
部長・次長・副部長など	1(0.2)	2(0.2)	3(0.2)
役員・経営者	2(0.5)	1(0.1)	3(0.2)
その他	1(0.2)	4(0.4)	5(0.4)
未回答	61(14.2)	89(8.7)	152(10.4)
計	431(100.0)	1,019(100.0)	1,457(100.0)

分析1 相関分析

本分析で用いる変数の相関分析（ピアソンの相関係数）の結果を示す。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
1 性	—															
2 社会階層	.00	—														
3 (高2)勉強タイプダミー	.06*	.06*	—													
4 (高2)部活動タイプダミー	-.05	-.05	-.42**	—												
5 (高2)交友通信タイプダミー	.12**	-.02	-.26**	-.20**	—											
6 (高2)行事不参加タイプダミー	.00	-.03	-.28**	-.21**	-.13**	—										
7 (高2)都市度	.01	-.01	.01	-.04	-.03	.05	—									
8 (高2)高校の進学校程度	-.06*	.21**	.15**	-.04	-.10**	.01	-.10**	—								
9 (高2)中高一貫	.03	.17**	.11**	-.10**	-.06*	.05	-.03	.06*	—							
10 (高2)地域移動	.04	.09**	-.10**	.02	.07*	.06*	-.01	.03	.08**	—						
11 (入学時)入試形態	.02	-.04	-.09	.03	.08	-.01	-.09	.03	-.07	-.02	—					
12 (入学時)第一志望	-.03	-.04	-.04	.01	-.03	.06	-.05	.10**	-.05	.00	.05	—				
13 (入学時)国立ダミー	-.06*	.04	-.09**	-.01	-.14**	.01	.01	.17**	.00	-.18**	.08	-.20**	—			
14 (入学時)私立ダミー	.06*	-.03	-.09**	-.02**	.14**	-.01	-.03	-.21**	.00	.14**	-.05	.20**	-.70**	—		
15 (入学時)大学偏差値	-.09**	.23**	.16**	-.12**	-.10**	.01	.00	.41**	.31**	.04	.05	-.24**	.23**	-.21**	—	
16 (入学時)人文系学部ダミー	.04	.00	.09	.00	.04	-.04	-.02	-.03	.05	-.05	.00	.00	-.01	.00	.12*	—
17 (入学時)理科学部ダミー	.12*	.03	-.07	-.05	-.03	.07	-.01	-.04	.00	.02	-.02	-.02	.02	-.02	.00	-.37**
18 (入学時)4年制医療系学部ダミー	-.16**	.02	-.02	-.03	.07	-.07	-.10	-.04	.00	-.03	.01	-.06	.10*	-.08	.06	-.20**
19 (大1)二つのライフ	.05	-.03	.16**	-.08**	-.02	-.12**	-.01	-.01	-.03	-.04	-.05	.01	-.06*	.06*	-.12**	.01
20 (大1)主体的な学習態度	.05	.01	.17**	-.05	-.13**	-.13**	-.05	-.02	-.02	-.04	.04	-.02	-.05	.07*	.00	.04
21 (大1)AL外化	-.08**	.09**	.08**	-.03	-.03	-.13**	-.08**	.09**	.00	-.03	-.03	-.02	.01	-.02	.03	.00
22 (大1)授業外学習時間	.02	.06*	.12**	-.07*	-.05	-.06*	-.01	.05	-.01	-.04	-.10	-.06*	.03	-.05	.09**	-.03
23 (大1)成績	.10**	-.02	.11**	-.05	-.11**	.03	.02	.01	-.01	.02	-.08	.02	.01	.02	-.01	.00
24 (大3)二つのライフ	.01	-.03	.15**	-.08**	.01	-.14**	-.03	.02	-.04	-.11**	.04	-.02	.03	-.03	.01	.02
25 (大3)主体的な学習態度	.07*	-.01	.13**	-.07**	-.11**	-.09**	-.04	-.03	-.03	-.05	-.01	.00	-.05	.08**	-.05	.03
26 (大3)AL外化	-.06*	.06*	.10**	-.05	.00	-.13**	-.05	.11**	.00	.00	.00	-.03	.01	-.01	.06*	.00
27 (大3)授業外学習時間	.08**	-.01	.13**	-.08**	-.05	-.04	.03	.03	.00	-.04	.00	-.02	.04	-.10**	-.07*	-.01
28 (大3)成績	.12**	-.04	.09**	-.05	-.02	-.06*	.01	-.03	-.03	.04	-.05	-.02	-.04	.05	-.03	.04
29 (社3)組織社会化	-.03	.04	.13**	-.02	.03	-.15**	.00	.04	.03	-.02	-.04	-.01	-.06*	.06*	.05	.02
30 (社3)能力向上	.02	.06*	.12**	-.03	.01	-.12**	.01	.07*	.00	-.03	-.09	-.02	-.07*	.08**	.07*	.04
31 (社3)資質能力	-.01	.05	.13**	-.04	.03	-.18**	-.03	.11**	-.01	-.03	-.03	-.01	-.02	.03	.08*	.03

	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
1 性															
2 社会階層															
3 (高2)勉強タイプダミー															
4 (高2)部活動タイプダミー															
5 (高2)交友通信タイプダミー															
6 (高2)行事不参加タイプダミー															
7 (高2)都市度															
8 (高2)高校の進学校程度															
9 (高2)中高一貫															
10 (高2)地域移動															
11 (入学時)入試形態															
12 (入学時)第一志望															
13 (入学時)国立ダミー															
14 (入学時)私立ダミー															
15 (入学時)大学偏差値															
16 (入学時)人文系学部ダミー															
17 (入学時)理科学部ダミー	—														
18 (入学時)4年制医療系学部ダミー	-.21**	—													
19 (大1)二つのライフ	-.03	.01	—												
20 (大1)主体的な学習態度	.01	-.01	.24**	—											
21 (大1)AL外化	.07	-.01	.18**	.32**	—										
22 (大1)授業外学習時間	.12*	-.05	.10**	.31**	.15**	—									
23 (大1)成績	-.01	.05	.17**	.36**	.11**	.10**	—								
24 (大3)二つのライフ	-.03	.05	.42**	.16**	.21**	.09**	.09**	—							
25 (大3)主体的な学習態度	-.06	.05	.19**	.65**	.27**	.24**	.33**	.24**	—						
26 (大3)AL外化	-.02	.02	.19**	.30**	.48**	.14**	.10**	.25**	.34**	—					
27 (大3)授業外学習時間	.06	-.01	.15**	.14**	.02	.27**	.06*	.13**	.17**	.04	—				
28 (大3)成績	-.02	.05	.16**	.31**	.12**	.11**	.57**	.14**	.41**	.13**	.06*	—			
29 (社3)組織社会化	.06	.01	.15**	.17**	.24**	.06*	.08**	.16**	.15**	.27**	.02	.08**	—		
30 (社3)能力向上	.09	.00	.16**	.22**	.27**	.12**	.11**	.20**	.19**	.27**	.05	.09**	.68**	—	
31 (社3)資質能力	.03	.06	.18**	.28**	.34**	.07**	.10**	.23**	.27**	.35**	.05	.09**	.56**	.71**	—

分析2 高校2年生から社会人3年目にかけて資質・能力は変化するか

高校2年生から社会人3年目にかけて、資質・能力（他者理解力、計画実行力、コミュニケーション・リーダーシップ力、社会文化探究心）がどのように変化するかを、潜在クラス成長分析（Latent Class Growth Analysis; LCGA; Nagin, 2005）によって検討する。分析にはM-Plus version 8.6を使用した。

結果と考察

クラス選定の基準に以下のものがある。（1）SSABIC（Sample Sized Adjusted Bayesian Information Criterion）の値が小さいほど望ましいこと、（2）Entropyの値が.75以上が望ましいこと、（3）LMR-LRT（Lo-Mendell-Rubin adjusted likelihood ratio test）が有意であること（ $p<.05$ ）（Macia & Wickham, 2019）、（4）最低でも1クラスに5%以上のサンプルが含まれること、（5）解釈可能性があること（Enders, 2010；Reinecke, 2006）。図表1、2に示す結果とこれらの選定基準に基づいて、ここでは3クラスを抽出した。3クラス別に、4つの資質・能力の得点を高2～社3まで6時点プロットして図表化したものを図表3に示す。

図表に示される通り、3クラスはそれぞれ“高クラス”“中クラス”“低クラス”と命名されるような単純なグループでまとまっている。この結果は、高2～社3にかけて、生徒学生の資質・能力が、クラス移動するほどの変化をしないことを示唆している（たとえば低群から中群・高群へ、中群から高群・低群へ変化することは統計上起こっていない）。高2～大4までで示してきた結果と同じである。

社3における各クラスの得点はいずれも、高2～大4にかけてのそれから落ち込んでいる。その落ち込みは、各クラスの傾きの多くが有意に負の値を示していることから（図表2を参照）、統計的にも明らかである。なぜこれまで安定的に、一定程度上昇してきた資質・能力の得点が社会人になって落ち込むのかは本調査からはわからない。興味深い問いであり、今後の課題としたい。

図表1 潜在クラス成長分析によるモデル適合度

Solution	SSABIC	LMR-LRT	Entropy	Trajectory group prevalence (%)				
				1	2	3	4	5
Class3	60403.973	0.0044	0.851	29.5	20.2	50.3		
Class4	59906.619	0.0153	0.849	44.7	27.7	5.8	21.7	
Class5	59676.663	0.2987	0.843	7.4	5.5	22.4	21.5	43.2

図表2 各クラスにおける4つの資質・能力の切片・傾き

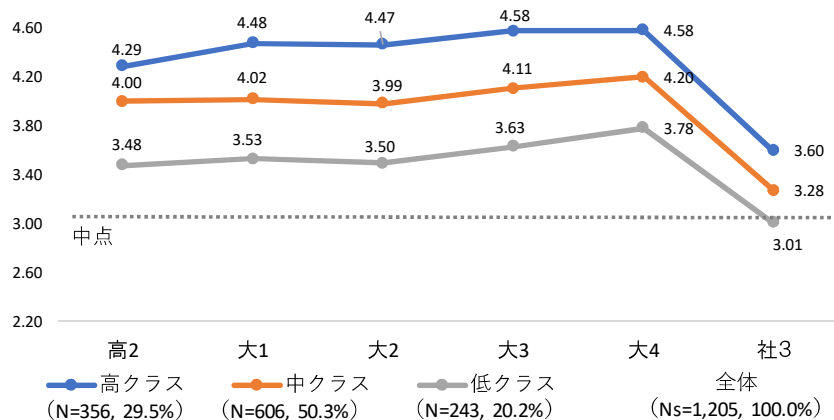
		高クラス	中クラス	低クラス	
他者理解力	切片	4.543 ***	4.162 ***	3.581 ***	
	傾き	-0.062 ***	-0.065 ***	-0.026 *	
計画実行力	切片	4.060 ***	3.441 ***	2.652 ***	
	傾き	-0.084 ***	-0.055 ***	-0.001	
コミュニケーション・リーダーシップ力	切片	4.239 ***	3.645 ***	2.834 ***	
	傾き	-0.029 **	-0.014	0.028 *	
社会文化探究心	切片	4.348 ***	3.813 ***	3.276 ***	
	傾き	-0.081 ***	-0.077 ***	-0.058 ***	

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

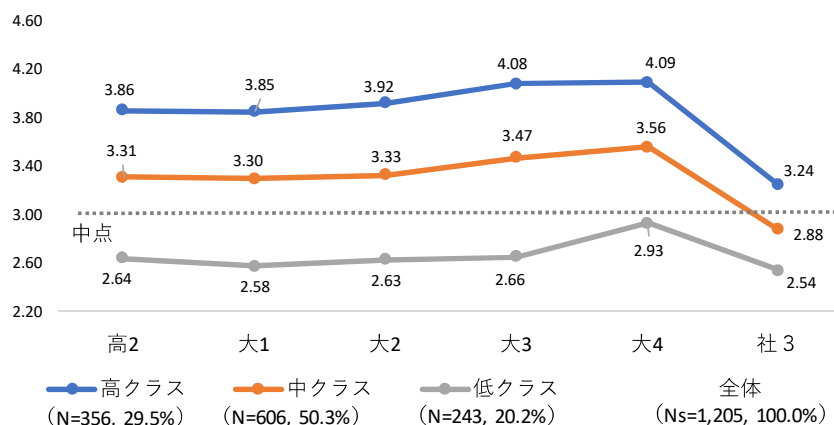
文献

- Enders, C. K. (2010). *Applied missing data analysis*. New York: Guilford.
- Nagin, D. S. (2005). *Group-based modeling of development*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Macia, K. S., & Wickham, R. E. (2019). The impact of item misspecification and dichotomization on class and parameter recovery in LCA of count data the impact of item misspecification and dichotomization on class and parameter recovery in LCA of count data. *Multivariate Behavioral Research*, 54(1), 1–33.
- Reinecke, J. (2006). Longitudinal analysis of adolescents' deviant and delinquent behavior: Applications of latent class growth curves and growth mixture models. *Methodology European Journal of Research Methods for the Behavioral and Social Sciences*, 2, 100–112.

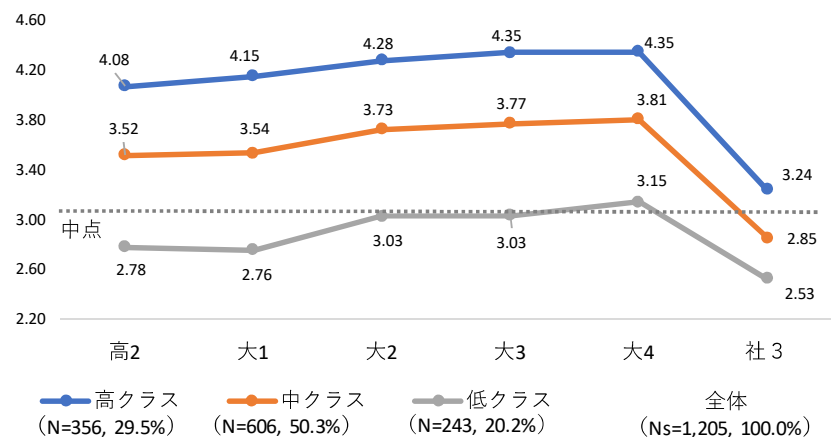
<他者理解力>



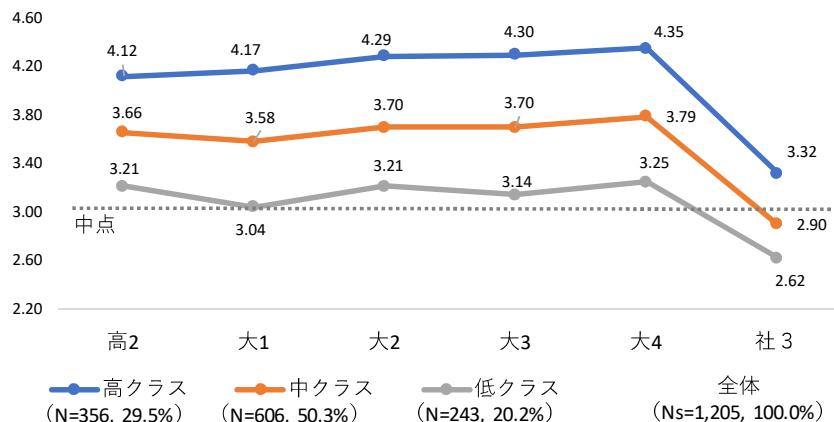
<計画実行力>



<コミュニケーションリーダーシップ力>



<社会文化探究心>



図表3 潜在クラス成長分析の結果(高校2年生～社会人3年目)

分析3 属性変数(社会経済的地位や高校の大学進学程度など)との関連

社会人3年目の評価指標である「組織社会化」「能力向上」「資質能力」と属性変数(社会経済的地位や高校の大学進学程度など)との関連を分析して、社会人に影響を及ぼすと考えられる属性について統計的に検討する。

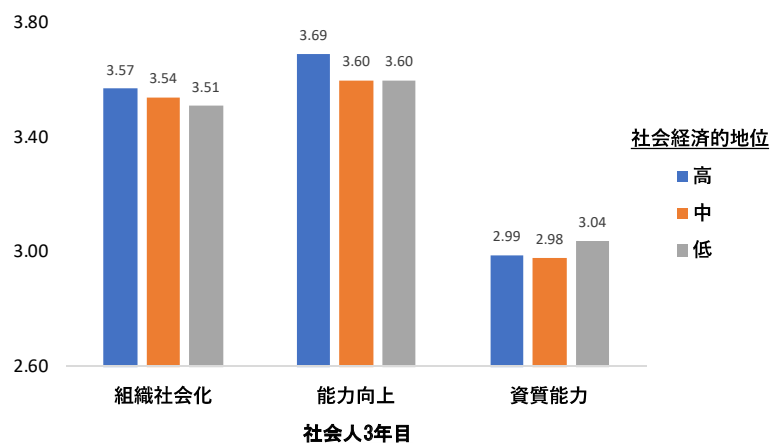
結果と考察

分散分析、t検定を行った結果、

- ・生徒タイプ(高2)
- ・二つのライフ(大1)
- ・二つのライフ(大3)

において、5%以上の有意差かつ小以上の効果量が認められた。高校時の日々の過ごし方(生徒タイプ)や大学時のキャリア意識(二つのライフ)が社会人の「組織社会化」「能力向上」「資質能力」と関連していることを示唆している。「社会経済的地位」「入学した大学の偏差値」の属性変数との関連は有意差が認められなかったが、「高校の大学進学程度」とは1%の有意差かつ効果量(小)が認められた。

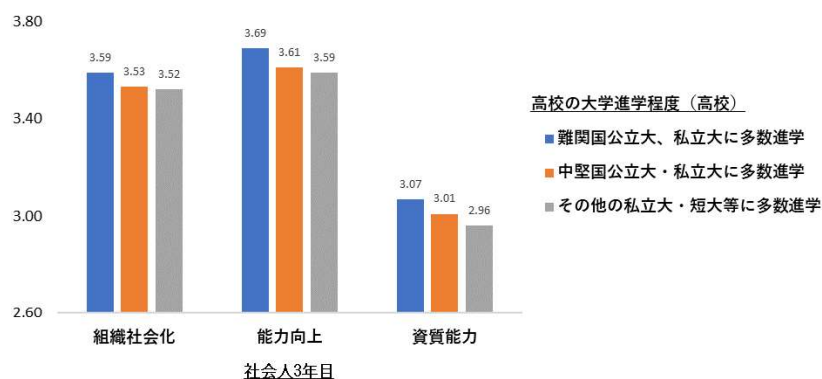
<社会経済的地位>



社会人3年目		N	組織社会化	能力向上	資質能力
社会 経済 的 地 位	高	338	3.57 (0.68)	3.69 (0.53)	2.99 (0.41)
	中	402	3.54 (0.62)	3.60 (0.57)	2.98 (0.42)
	低	466	3.51 (0.61)	3.60 (0.56)	3.04 (0.40)

- ・組織社会化： $F(2, 1203)=0.71, n.s., \eta^2=.00$ (効果量なし)
- ・能力向上： $F(2, 1202)=2.79, n.s., \eta^2=.01$ (効果量なし)
- ・資質能力： $F(2, 1202)=2.52, n.s., \eta^2=.01$ (効果量なし)

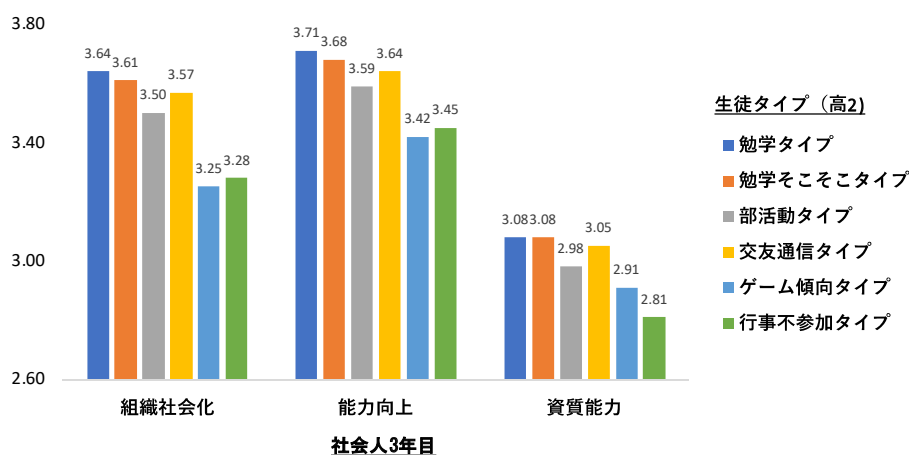
<高校の大学進学程度>



社会人3年目		N	組織社会化	能力向上	資質能力
高 校	難関国公立大・私立大に多数進学	258	3.59 (0.66)	3.69 (0.58)	3.07 (0.42)
	中堅国公立大・私立大に多数進学	356	3.53 (0.63)	3.61 (0.56)	3.01 (0.42)
	その他の私立大・短大等に多数進学	478	3.52 (0.59)	3.59 (0.53)	2.96 (0.39)

- ・組織社会化： $F(2,1089)=1.16, n.s., \eta^2=.00$ (効果量なし)
- ・能力向上： $F(2,1088)=2.67, n.s., \eta^2=.01$ (効果量なし)
- ・資質能力： $F(2,1088)=6.73, p<.01, (Tukey) 3>1, \eta^2=.01$ (効果量小)

<生徒タイプ(高2)>

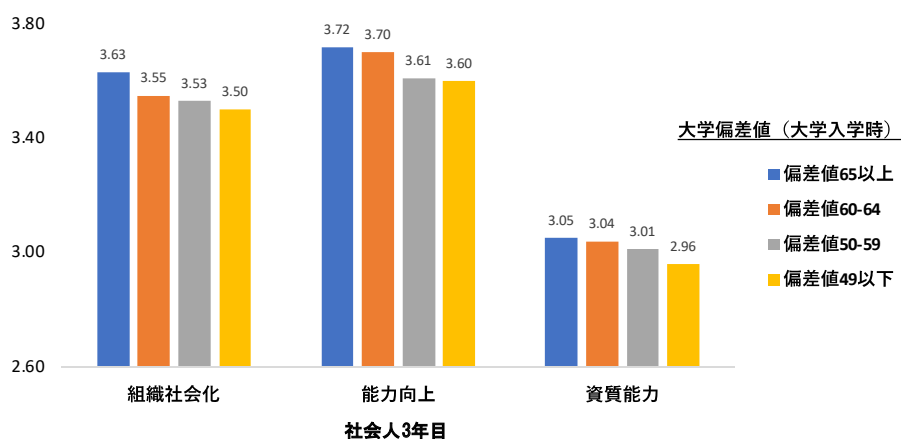


社会人3年目		N	組織社会化	能力向上	資質能力
1	勉強タイプ	415	3.64 (0.58)	3.71 (0.54)	3.08 (0.40)
2	勉強そこそこタイプ	126	3.61 (0.58)	3.68 (0.48)	3.08 (0.40)
3	部活動タイプ	278	3.50 (0.60)	3.59 (0.53)	2.98 (0.40)
4	交友通信タイプ	128	3.57 (0.66)	3.64 (0.52)	3.05 (0.38)
6	ゲーム傾向タイプ	50	3.25 (0.69)	3.42 (0.60)	2.91 (0.42)
7	行事不参加タイプ	147	3.28 (0.74)	3.45 (0.63)	2.81 (0.44)

- ・組織社会化： $F(5,1138)=10.12, p<.001, (Tukey) 1, 2, 4 > 6, \eta^2=.04$ (効果量小)
- ・能力向上： $F(5,1137)=7.02, p<.001, (Tukey) 1, 2 > 6, \eta^2=.03$ (効果量小)
- ・資質能力： $F(5,1137)=11.25, p<.001, (Tukey) 2, 1 > 7, \eta^2=.05$ (効果量小)

(注)生徒タイプ5(読書傾向タイプ)は度数が少なく(N=21)、分析からは除外した。

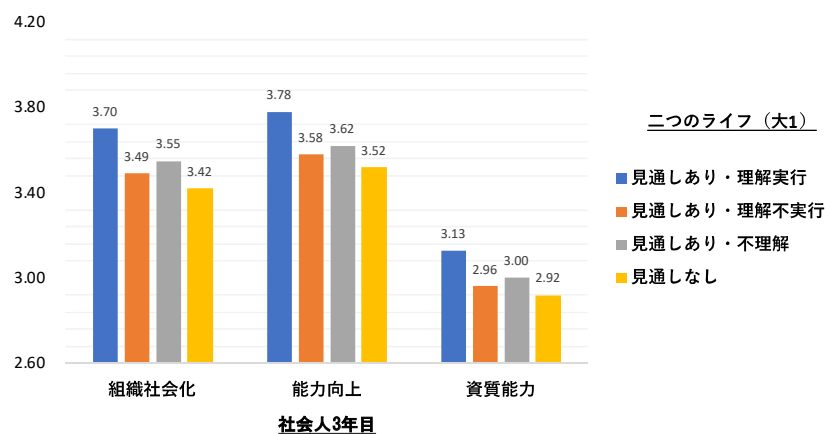
<入学した大学の偏差値>



大学 入学 時	社会人3年目				
		N	組織社会化	能力向上	資質能力
	偏差値65以上	111	3.63 (0.72)	3.72 (0.55)	3.05 (0.42)
	偏差値60-64	122	3.55 (0.62)	3.70 (0.53)	3.04 (0.41)
	偏差値50-59	561	3.53 (0.61)	3.61 (0.55)	3.01 (0.41)
	偏差値49以下	295	3.50 (0.64)	3.60 (0.56)	2.96 (0.40)

- ・組織社会化： $F(3,1085)=1.12, n.s., \eta^2=.00$ （効果量なし）
- ・能力向上： $F(3, 1084)=2.25, n.s., \eta^2=.01$ （効果量なし）
- ・資質能力： $F(3, 1084)=2.31, n.s., \eta^2=.01$ （効果量なし）

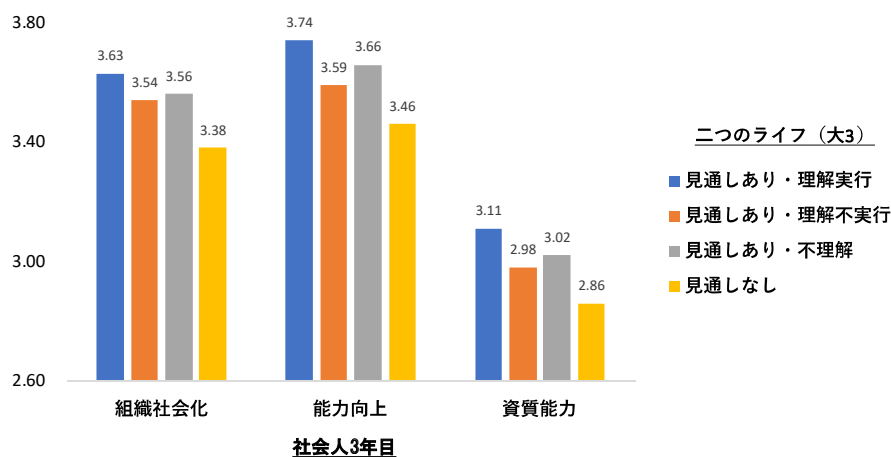
<二つのライフ(大1)>



1 大 学 1 年 生	社会人3年目				
		N	組織社会化	能力向上	資質能力
			(1-5点)	(1-5点)	(1-4点)
	見通しあり・理解実行	279	3.70 (0.63)	3.78 (0.56)	3.13 (0.41)
	見通しあり・理解不実行	220	3.49 (0.61)	3.58 (0.51)	2.96 (0.38)
3 年 生	見通しあり・不理解	427	3.55 (0.59)	3.62 (0.53)	3.00 (0.39)
	見通しなし	367	3.42 (0.66)	3.52 (0.57)	2.92 (0.43)

- ・組織社会化： $F(3,1289)=11.09, p<.001,$ (Tukey) $1 > 3, 2, 4, \eta^2=.03$ （効果量小）
- ・能力向上： $F(3, 1288)=12.60, p<.001,$ (Tukey) $1 > 3, 2, 4, \eta^2=.03$ （効果量小）
- ・資質能力： $F(3, 1288)=15.32, p<.001,$ (Tukey) $1 > 3, 2, 4, \eta^2=.04$ （効果量小）

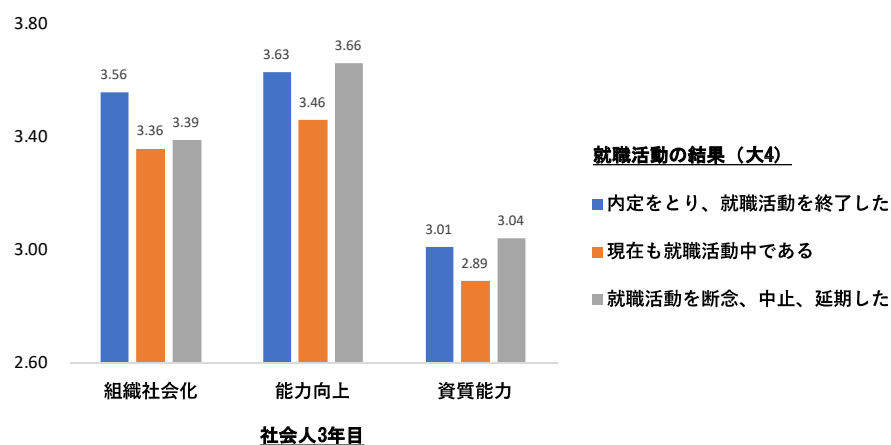
<二つのライフ(大3)>



		社会人3年目			
	N	組織社会化	能力向上	資質能力	
		(1-5点)	(1-5点)	(1-4点)	
1 大学	見通しあり・理解実行	442	3.63 (0.62)	3.74 (0.51)	3.11 (0.40)
2 学	見通しあり・理解不実行	209	3.54 (0.55)	3.59 (0.52)	2.98 (0.39)
3 年	見通しあり・不理解	285	3.56 (0.59)	3.66 (0.52)	3.02 (0.38)
4 生	見通しなし	357	3.38 (0.68)	3.46 (0.61)	2.86 (0.43)

- ・組織社会化： $F(3,1289)=11.81, p<.001$, (Tukey) 1, 3, 2 > 4, $\eta^2=.03$ (効果量小)
- ・能力向上： $F(3, 1288)=18.05, p<.001$, (Tukey) 1 > 2 > 4, $\eta^2=.04$ (効果量小)
- ・資質能力： $F(3, 1288)=25.36, p<.001$, (Tukey) 1 > 3, 2 > 4, $\eta^2=.06$ (効果量小)

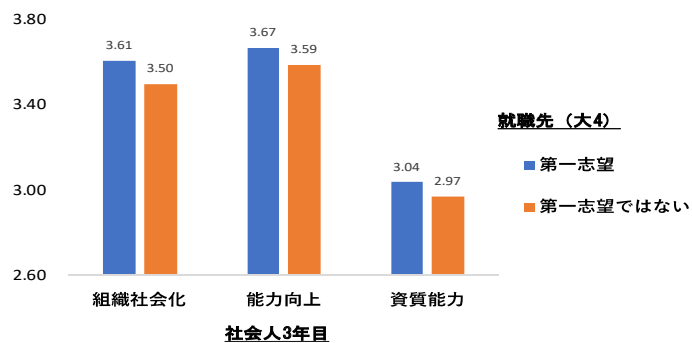
<就職活動の結果(大4)>



		社会人3年目			
	N	組織社会化	能力向上	資質能力	
		(1-5点)	(1-5点)	(1-4点)	
大学4年生	内定をとり、就職活動を終了した	1,116	3.56 (0.62)	3.63 (0.55)	3.01 (0.41)
	現在も就職活動中である	98	3.36 (0.62)	3.46 (0.58)	2.89 (0.42)
	就職活動を断念、中止、延期した	24	3.39 (0.61)	3.66 (0.50)	3.04 (0.40)

- ・組織社会化： $F(2,1235)=5.31, p<.01$, (Tukey) 有意差なし, $\eta^2=.01$ (効果量なし)
- ・能力向上： $F(2, 1234)=4.32, p<.05$, (Tukey) 有意差なし, $\eta^2=.01$ (効果量なし)
- ・資質能力： $F(2, 1234)=3.48, p<.05$, (Tukey) 有意差なし, $\eta^2=.01$ (効果量なし)

<就職先は第一志望であったか(大4)>



		社会人3年目			
大学 4 年生		N	組織社会化	能力向上	資質能力
			(1-5点)	(1-5点)	(1-4点)
	第一志望の就職先	596	3. 61 (0. 61)	3. 67 (0. 56)	3. 04 (0. 42)
	第一志望の就職先ではない	520	3. 50 (0. 64)	3. 59 (0. 54)	2. 97 (0. 40)

- ・組織社会化： $t(1115)=2.99, p<.01$
 $d=.13$ (効果量なし)
- ・能力向上： $t(1114)=2.24, p<.05$
 $d=.10$ (効果量なし)
- ・資質能力： $t(1114)=2.63, p<.01$
 $d=.09$ (効果量なし)

分析4 高校・大学時の学習・生活・キャリア等が社会人に及ぼす影響

目的変数として設定する社会人3年目の「組織社会化」「能力向上」「資質能力」に、高校・大学時におけるどのような変数が影響を及ぼしているかをパス解析によって検討した。ただし、調査が過去大きく5時点で行われていること、高校・大学時それぞれで検討した変数が多数あることから、本分析では以下の3つの条件に従って時期・変数を絞り込み、高校から大学、社会へのトランジションの変化・影響を分析するパスモデルを設定した。

①分析対象の時期：

高校2年生（高2）－大学1年生（大1）－大学3年生（大3）－社会人3年目（社3）

②高校時の要因：

分析1で示した相関係数の結果を見て、モデルの目的変数である「組織社会化（社3）」「能力向上（社3）」「資質能力（社3）」と相関係数（ r ）が0.1以上であるもの（p.9を参照）

③大学時の要因

これまでの報告書で主に分析してきた5つの変数を用いる。「二つのライフ」「主体的な学習態度」「AL外化」「授業外学習時間」「成績」

結果と考察

パス解析を行い、5%以上で有意なパスのみを残した最終分析の結果を図表4に示す。分析から明らかになった主な結果について、以下考察を行う。

◆分析3（p.12～）で示した結果と同様に、本分析からも「社会経済的地位」「入学した大学の偏差値」の属性要因は、パス解析前の条件を満たさず、本モデルに影響を及ぼす変数ではないと見なされた。「高校の大学進学程度」は条件を満たしパスモデルには組み込まれたものの、.10以上のパス係数は認められず、本モデルでの影響は大きくないと考えられた。

◆本モデルの目的変数である「組織社会化（社3）」「能力向上（社3）」「資質能力（社3）」に、.10以上の大きさで直接的な影響を及ぼしていたのは、大学1年生、3年生の「AL外化」のみであった。AL外化は、大学1・3年生いずれも「二つのライフ」（.18、.25）「主体的な学習態度」（.32、.34）と低い、あるいは中程度の相関が見られるので（括弧内は大1、大3のAL外化との相関係数、p.9より）、同時期における学習やキャリアと関連しながら社会人3年目に直接的に影響を及ぼす変数として取り出されるのだと理解される。

>AL外化（大1）

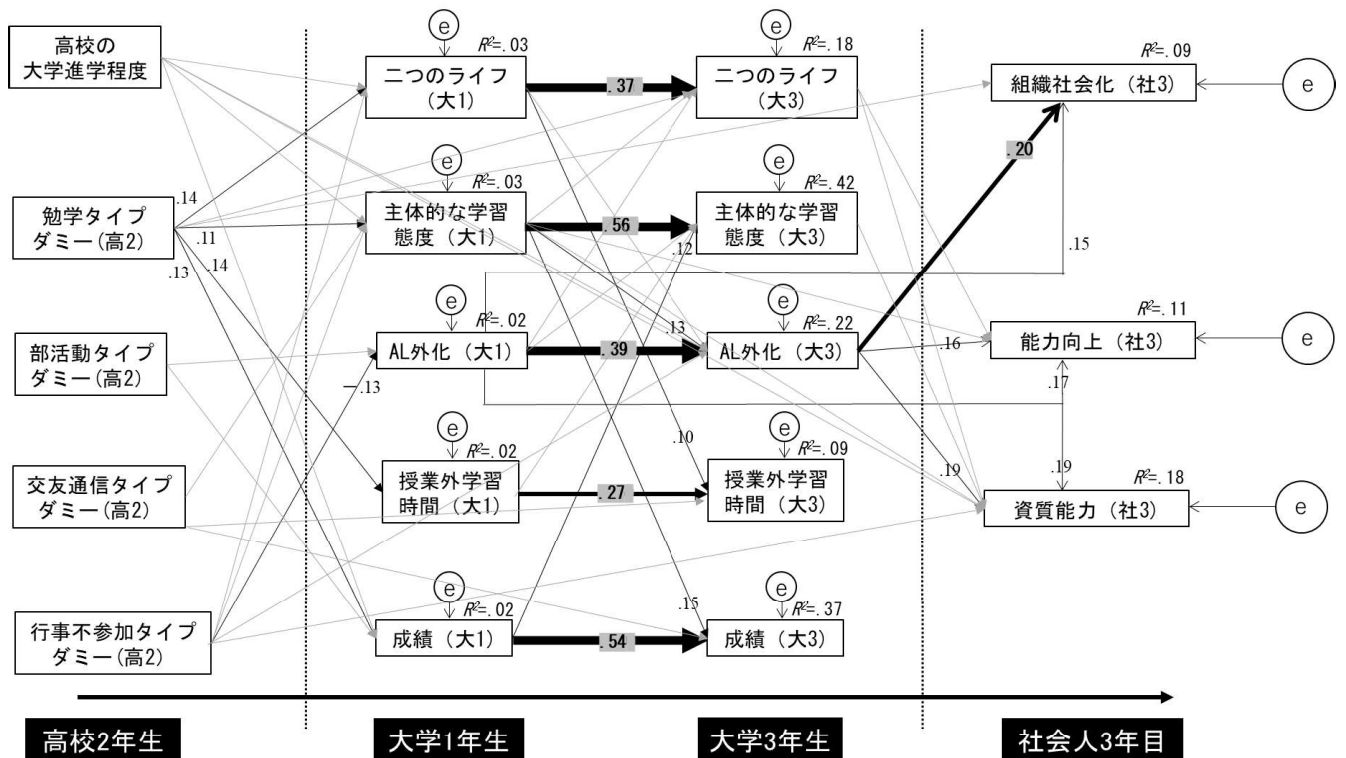
→組織社会化（社3）（.15）、能力向上（社3）（.17）、資質能力（社3）（.19）

>AL外化（大3）

→組織社会化（社3）（.20）、能力向上（社3）（.16）、資質能力（社3）（.19）

※数値はパス係数

AL外化の大学1年生から3年生へのパス係数を見ると、.39と高いものの、両時期で変化しにくいと見るほどの高さではないことがわかる。前回（大学4年生調査）の報告書で示したように（図表5を参照）、AL外化は4年間で安定したクラス（高クラス維持、中クラス維持、低クラス維持）がある一方で、変化するクラス（低クラスから高クラス、低から中クラス、低から低低クラス）も認められる。AL外化（大1）は、社会人に直接影響を及ぼす変数であると同時に、大学3年にかけて変化していく変数であるとも考えられる。

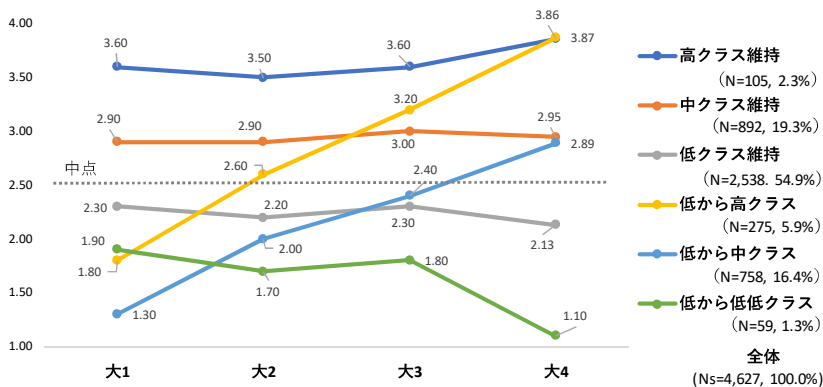


図表4 パス解析の結果(高校2年生～社会人3年目)

*モデル適合度: $\chi^2(75)=350.667, p<.001, CFI=.993, RMSEA=.009$

*図表中のパス係数はすべて $p<.05$ 以上で有意である。誤差項の相関はすべて省略している。パス係数.20以上を強調している。

*薄い線はパス係数が.10未満のもので、係数は図示していない。すべての数値は次ページの表で示している。



図表5 大学1～4年生のAL外化の変化(潜在クラス成長分析の結果)

*溝上慎一・学校法人河合塾(編)『「学校と社会をつなぐ調査」4時点目成果報告書』(2019年4月)＞河合塾グループサイト「学校と社会をつなぐ調査 | 教育研究開発活動」p.19に所収

https://www.kawaijuku.jp/jp/research/sch/pdf/2019_TransitionReportT4.pdf

◆大学1年生と3年生の同じ変数間のパス係数が高い。この結果は、本分析で扱った5つの変数が大学1年生から3年生にかけて変化しにくいことを示唆している。とくに「主体的な学習態度」(.56)、「成績」(.54)で高い値を示していたが、成績については、10年前からGPAが大学1年生から4年生・卒業時に向けて変化しにくいことが示唆されており（たとえば溝上, 2013）、ここでの結果もそれを支持するものである。

他方で、「授業外学習時間」(.27)、「二つのライフ」(.37)、「AL外化」(.39)は、高いパス係数であると言っても、可変性を十分認めることができる程度の値である。実際、前調査の結果（図表5）を紹介したように、大学1～4年生にかけて、20～25%の学生がAL外化を低から中へ、中から高へと変化させていた。変わりにくいとされる学びとキャリアの変数の中でも、学生を学び成長させていく可能性が高い変数はあると考えられる。

>二つのライフ (.37)

主体的な学習態度 (.56)

AL外化 (.39)

授業外学習時間 (.27)

成績 (.54)

※括弧内はパス係数

◆高校2年生の変数については、「勉学タイプダミー（高2）」と「行事不参加タイプダミー（高2）」が大学1年生の変数に.10以上のパス係数で影響を及ぼしていた。他方で、社会人3年目に影響を及ぼす、直接的なパス係数が.10以上で認められる変数は見られなかった。

>勉学タイプダミー（高2）→二つのライフ（大1）(.14)

勉学タイプダミー（高2）→主体的な学習態度（大1）(.11)

勉学タイプダミー（高2）→授業外学習時間（大1）(.14)

勉学タイプダミー（高2）→成績（大1）(.13)

行事不参加タイプダミー（高2）→AL外化（大1）(－.13)

※括弧内はパス係数

本モデルで設定した高校から大学、社会へのトランジションにおいては、高校2年生から社会人3年目への直接的な影響は大きくは認められなかった。前述の結果も併せて考察すると、高校から大学への移行期、その後大学生になってからの前半期、後半期といったように、節目節目の時期に学びやキャリア等に関する態度や意識を再構築する、すなわち間接効果を積み重ねていくことが実践的な教育や指導への示唆になると考えられる。濱中（2013）はトランジションにおける間接効果の意義を「学び習慣仮説」を通して示唆しており、本研究でもその見方を支持する結果が得られたと言える。

◆社会人3年目の変数（「組織社会化」「能力向上」「資質能力」）の説明率は低いものであった（ $R^2=.09-.18$ ）。このことから、大学から仕事・社会へのトランジションの直接的影響は認められるものの、社会3年時の変数をより実質的に説明するのは、社会人3年目の職場や社会生活の中にある要因であろうと考えられる。

文献

・濱中淳子（2013）. 検証・学歴の効用 勁草書房

・溝上慎一（2013）. 経験や勘からデータ重視へと教学改善を跳躍させるIR 進研アド

『Between』2013年10-11月号

大学1年生						
説明変数	二つのライフ	主体的な学習態度	AL外化	授業外学習時間	成績	
(高2) 高校の大学進学程度	-.04	-.07				-.04
(高2) 勉学タイプダミー	.14	.11		.14		.13
高校2年生 (高2) 部活動タイプダミー			-.08			.06
(高2) 交友通信タイプダミー		-.09				
(高2) 行事不参加タイプダミー	-.08	-.07	-.13			
(大1) 二つのライフ	-	-	-	-	-	-
(大1) 主体的な学習態度	-	-	-	-	-	-
大学1年生 (大1) AL外化	-	-	-	-	-	-
(大1) 授業外学習時間	-	-	-	-	-	-
(大1) 成績	-	-	-	-	-	-
(大3) 二つのライフ	-	-	-	-	-	-
(大3) 主体的な学習態度	-	-	-	-	-	-
大学3年生 (大3) AL外化	-	-	-	-	-	-
(大3) 授業外学習時間	-	-	-	-	-	-
(大3) 成績	-	-	-	-	-	-
	.03	.03	.02	.02	.02	.02

大学3年生						
説明変数	二つのライフ	主体的な学習態度	AL外化	授業外学習時間	成績	
(高2) 高校の大学進学程度			.06			
(高2) 勉学タイプダミー	.08					
高校2年生 (高2) 部活動タイプダミー						
(高2) 交友通信タイプダミー				-.07		.05
(高2) 行事不参加タイプダミー			-.06			
(大1) 二つのライフ	.37		.09	.10		
(大1) 主体的な学習態度	.07	.56	.13			.15
大学1年生 (大1) AL外化	.09	.05	.39			
(大1) 授業外学習時間		.05		.27		
(大1) 成績		.12				.54
(大3) 二つのライフ	-	-	-	-	-	-
(大3) 主体的な学習態度	-	-	-	-	-	-
大学3年生 (大3) AL外化	-	-	-	-	-	-
(大3) 授業外学習時間	-	-	-	-	-	-
(大3) 成績	-	-	-	-	-	-
	R^2	.18	.42	.22	.09	.37

社会人 3 年目				
	説明変数	組織社会化	能力向上	資質能力
高校2年生	(高2) 高校の大学進学程度			.05
	(高2) 勉学タイプダミー	.05		
	(高2) 部活動タイプダミー			
	(高2) 交友通信タイプダミー			
	(高2) 行事不参加タイプダミー			-.07
大学1年生	(大1) 二つのライフ			
	(大1) 主体的な学習態度		.07	.08
	(大1) AL外化	.15	.17	.19
	(大1) 授業外学習時間			
	(大1) 成績			
大学3年生	(大3) 二つのライフ		.07	.08
	(大3) 主体的な学習態度			.06
	(大3) AL外化	.20	.16	.19
	(大3) 授業外学習時間			
	(大3) 成績			
	R^2	.09	.11	.18

*ここでの数値はすべて5%以上で有意である(p<.05)。

付録 使用変数の説明

● 資質・能力(高2, 大1, 大2, 大3, 大4, 社3)

資質・能力に関する18項目を下記の通り尋ねた。

「最近のあなたをふり返って、下記の事柄がどの程度身についたと感じますか」(5件法)

- | | |
|---|-------------------------------|
| (1) 計画や目標を立てて日々を過ごすことができる | (10) 時間を有効に使うことができる |
| (2) 社会の問題に対して分析したり考えたりすることができる | (11) 新しいアイデアを得たり発見したりすることができる |
| (3) リーダーシップをとることができる | (12) 困難なことでもチャレンジすることができる |
| (4) 図書館やインターネットを利用して必要な情報を得たりわからないことを調べたりすることができる | (13) 人の話を聞くことができる |
| (5) 他の人と議論することができる | (14) 自分とは異なる意見や価値を尊重することができる |
| (6) 自分の言葉で文章を書くことができる | (15) 人に対して思いやりを持つことができる |
| (7) 人前で発表をすることができる | (16) 忍耐強く物事に取り組むことができる |
| (8) 他の人と協力して物事に取り組める | (17) 異文化や世界に関心を持つことができる |
| (9) コンピュータやインターネットを操作することができる | (18) 自分を客観的に理解することができる |

本研究では、因子分析の結果を見て4因子で整理し、因子負荷の高い項目を用いて加算平均をし分析を行った。

- (1) 他者理解力: 項目(13)(14)(15)の加算平均。 $\alpha = .77 / .80 / .82 / .81 / .79 / .80$ *高2～社3の順で示す。
(2) 計画実行力: 項目(1)(10)(12)(16)の加算平均。 $\alpha = .77 / .76 / .77 / .78 / .78 / .74$ *項目(9)(11)(18)は因子分析の結果、因子負荷量が低く、分析から除外している。
(3) コミュニケーション・リーダーシップ力: 項目(3)(5)(6)(7)(8)の加算平均。 $\alpha = .81 / .79 / .82 / .80 / .79 / .79$
(4) 社会文化探究心: 項目(2)(4)(17)の加算平均。 $\alpha = .61 / .54 / .60 / .52 / .54 / .56$

● 成績(大1, 大3)

「あなたの成績は平均してどれくらいですか。もっとも近い番号を1つ選んでください。」

- (6) 履修した科目の80%以上が優(80点以上)の成績である (3) 履修した科目の20～40%未満が優(80点以上)の成績である
(5) 履修した科目の60～80%未満が優(80点以上)の成績である (2) 履修した科目の20%以下が優(80点以上)の成績である
(4) 履修した科目の40～60%未満が優(80点以上)の成績である (1) その他(わからない、覚えていない、など)

本研究では、(1)を欠損値として処理して分析を行った。

● 主体的な学習態度(大1, 大3)

「以下のそれぞれの項目内容は、あなたにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つ選んで、数字に○をつけてください。」(5件法)

*授業や場合によって変わるかもしれませんが、「一般的にこの程度」という感覚でお答えください。

*課題、プレゼンテーション、レポートの経験がない方は、「出されたらどのように取り組むか」ということを想定してお答えください。

- (1) レポートや課題はただ提出すればいいという気分で仕上げることが多い*
(2) レポートは満足がいくように仕上げる
(3) 授業には意欲的に取り組む
(4) 課題には最小限の努力で取り組む*
(5) 単位さえもらえればよいという気持ちで授業に出る*
(6) 課題は納得いくまで取り組む
(7) 課されたレポートや課題を少しでも良いものに仕上げようと努力する
(8) 授業はただぼうっと聞いている*
(9) プレゼンテーションの際、何を質問されても大丈夫なように十分に調べる

【出典】

畑野快・溝上慎一 (2013). 大学生の主体的な授業態度と学習時間に基づく学生タイプの検討 日本教育工学会論文誌, 37 (1), 13-21.

で開発した「主体的な授業態度」尺度を、畑野(2013)にならって、「主体的な学習態度」尺度と名称を変えて使用している。

畑野快 (2013). 大学生の内発的動機づけが自己調整学習方略を媒介して主体的な学習態度に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 37(Suppl.), 81-84.

本研究では、逆転項目(*)を反転させて、加算平均して分析を行った。大1($\alpha = .85$)、大3($\alpha = .87$)

● アクティブラーニング外化(AL外化)(大1, 大3)

「大学で、話し合いや発表のある授業に対して、以下の項目のような態度をどの程度とっていましたか。それぞれの項目について、もっとも近い選択肢を1つ選んでください。」(4件法)

*そういう授業が全くなかった人は、「あてはまらない」を選んでください。

- (1) 議論や発表の中で自分の考えをはっきりと示す
(2) 根拠を持ってクラスメイトに自分の意見を言う
(3) クラスメイトに自分の考えをうまく伝えられる方法を考える

【出典】

溝上慎一・森朋子・紺田広明・河井亨・三保紀裕・本田周二・山田嘉徳 (2016). Bifactorモデルによるアクティブラーニング(外化)尺度の開発 京都大学高等教育研究, 22, 151-162.

本研究では、加算平均して分析を行った。

大1($\alpha = .84$)、大3($\alpha = .82$)

● 二つのライフ(大1, 大3)

Q1「あなたは、自分の将来についての見通し(将来こういう風でありたい)を持っていますか。」

- (1) 持っている
(2) 持っていない

Q2「あなたは、その見通しの実現に向かって、今自分が何をすべきなのか分かっていますか。またそれを実行していますか。最もあてはまるものを1つお知らせください。」

- (1) 何をすべきか分かっているし、実行もしている
(2) 何をすべきかは分かっているが、実行はできていない
(3) 何をすべきかはまだ分からない

Q1、Q2の回答より、

- (4) 見通しあり・理解実行(Q1の(1)+Q2の(1)) →(3)
(3) 見通しあり・理解不実行(Q1の(1)+Q2の(2)) →(2)
(2) 見通しあり・不理解(Q1の(1)+Q2の(3)) →(2)
(1) 見通しなし(Q1の(2)) →(1)

のステイタスを作成し、それを(3)(2)(1)に再分類して得点化し、分析を行った。

【出典】

二つのライフの説明、ステイタス、再分類・得点化については下記の文献を参照のこと。

保田江美・溝上慎一(2014). 初期キャリア以降の探究―「大学時代のキャリア見通し」と「企業におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に 中原淳・溝上慎一編 活躍する組織人の探究―大学から企業へのトランジション― 東京大学出版会 pp.139-173.

● (大学生の)一週間の生活(大1, 大3)

「一週間の生活を振り返って、あなたは次の活動にどれくらいの時間を費やしていますか。一週間の平均的な時間数を記入例を参考にして記入してください。」

【出典】

京都大学高等教育研究開発推進センター・電通育英会主催『大学生のキャリア意識調査2013』調査票
<http://www.dentsu-ikueikai.or.jp/transmission/investigation/about-2/>

No	活動内容	記入例	
1	授業や実験に参加する	15 時間	時間
2	授業に関する勉強(予習や復習、宿題・課題など)をする	5 時間	時間
3	授業とは関係のない勉強を自主的にする	0 時間	時間
4	友達と会う、遊ぶ	5 時間	時間
5	クラブ・サークル活動をする	12 時間	時間
6	コンパや懇親会などに参加する	3 時間	時間
7	アルバイトをする	8 時間	時間
8	社会貢献活動をする(ボランティアやNPOの活動など)	0 時間	時間
9	テレビを見る	20 時間	時間
10	電話、LINE、メール交換、SNS(mixiやFacebookなど)をする	14 時間	時間
11	インターネットサーフィンをする	7 時間	時間
12	ゲーム(ゲーム機・コンピューターゲーム・オンラインゲーム)をする	0 時間	時間
13	勉強のための本(新書や専門書など)を読む	0 時間	時間
14	娯楽のための本(小説・一般書など、マンガや雑誌を除く)を読む	3 時間	時間
15	マンガや雑誌を読む	5 時間	時間
16	新聞を読む	0 時間	時間
17	通学にかかる時間	10 時間	時間

● 社会階層(高校卒業後)

父の学歴、母の学歴、世帯年収の3変数の得点を標準化して、加算平均し、(3) 高、(2) 中、(1) 低 と分類した。いずれかの変数が欠損だった場合には、2変数を用いて同様に加算平均した。

①あなたのご両親(またはそれにかわる方)の最終学歴をおたずねします。あてはまる番号を下の空欄に記入してください。

- (1) 中学まで (4) 短大や高専まで (7) 不明
(2) 高校まで (5) 大学まで (8) いらない
(3) 専修学校や各種学校(料理、コンピュータ、洋裁、デザイン、美容師などの学校)まで (6) 大学院まで * (7)(8)は欠損値として処理

A. お父さん(またはそれにかわる方)の最終学歴 ()

B. お母さん(またはそれにかわる方)の最終学歴 ()

②あなたが高校を卒業した頃のご家族全体の収入は次の中のどれに近いですか。

* あなた以外のご家族について、臨時収入、副収入、年金、株式配当などすべての収入を合わせた額(税や保険料などを差し引く前の額)をお答えください。

- (1) 200万円未満 (5) 500～600万円未満 (9) 900～1,000万円未満 (13) 分からない
(2) 200～300万円未満 (6) 600～700万円未満 (10) 1,000～1,200万円未満
(3) 300～400万円未満 (7) 700～800万円未満 (11) 1,200～1,500万円未満
(4) 400～500万円未満 (8) 800～900万円未満 (12) 1,500万円以上 * (13)は欠損値として処理

● 高校の大学進学程度(高2)

河合塾の進学資料を用いて、所属する高校を以下のいずれかに分類した。

(3) 難関国公立大・私立大に多数進学 (2) 中堅国公立大・私立大に多数進学 (1) その他の私立大・短大に多数進学

● 国公立大学(高校卒業後)

「現在在籍している大学は、国立ですか、公立ですか、私立ですか。」

(1) 国立 (2) 公立 (3) 私立

本研究では、(1) 国公立 (0) 私立 と再分類して分析を行った。

● 大学偏差値(高校卒業後)

現在在籍している大学を

河合塾の「入試難易ランキング予想表」(<http://www.keinet.ne.jp/rank/index.html>)を参考にして

(5) 偏差値65以上 (2) 偏差値40-49
(4) 偏差値60-64 (1) 偏差値39以下
(3) 偏差値50-59 (0) 不明

に分類した。本研究では、度数の関係から(1)と(2)を合算して、(2) 偏差値49以下 として分析を行った。

(0) 不明 は欠損値として処理した。

● 大学の所属学部・学科(高校卒業後)

「学部・学科の種類は何ですか。もっとも近い番号を選んでください。」

(1) 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)
(2) 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)
(3) 理科系(理学・工学・農学など)
(4) 芸術系(美術・音楽・デザイン学など)
(5) (1)～(4)以外の文科系でもあり理科系でもある
(6) 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)
(7) 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)
(8) その他()

本研究では、(4)と(5)と(8)を合算して(8) その他とし、

(1) 人文科学系(文学・教養・外国語・哲学・歴史学・教育学など)
(2) 社会科学系(法学・経済学・商学・社会学など)
(3) 理科系(理学・工学・農学など)
(6) 4年制の医療系(薬学・看護学・リハビリテーション学・社会福祉学など)
(7) 6年制の医療系(医学・歯学・薬学など)
(8) その他

とカテゴリーを整理して分析を行った。

● 職場における組織社会化尺度(組織社会化)(社3)

「次の文章はあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまる番号を○で囲んでください。」(5件法)

- (1) 自分の職務に関する特別な用語や専門用語をマスターしている
- (2) 自分の所属部署や一緒に仕事をしているグループの成り立ち・これまでの出来事について、よく知っている
- (3) 自分の仕事をうまくこなしていくうえで必要な技能(スキル)や能力を十分に身に付けている
- (4) 自分の会社内、職場内で、誰と誰は仲が良く、誰と誰は仲が悪いといったような人間関係をよく把握している
- (5) 自分の会社独自で使われる特有の言葉や言い方を習得している
- (6) 誰に影響力があるのか、出世するにはどうしたらいいのかといった部署内の政治について、よく理解している
- (7) 仕事の「こつ」を習得してる
- (8) 自分の会社の価値観や理念をよく理解し、それにふさわしい行動や振る舞いができる

館野・中原(2016)では、「職業的社会化」「文化的社会化」と2つ下位次元の合計得点が算出されている(pp.108-109)が、本研究では全項目の加算平均をし分析を行った。 $\alpha=.83$

【出典】

高橋弘司(1993). 組織社会化研究をめぐる諸問題ー研究レビューー 経営行動科学, 8(1), 1-22.

館野泰一(2016). 職場で主体的に行動できる人は、どのような大学生活を過ごしてきたかー大学での学び・生活が入社後のプロアクティブ行動に与える影響ー 館野泰一・中原淳(編) アクティブトランジションー働くためのウォーミングアップー 三省堂 pp.114-124.

館野泰一・中原淳(編)(2016). アクティブトランジションー働くためのウォーミングアップー 三省堂

● 職場における業務能力の向上(能力向上)(社3)

「次の文章はあなたにどのくらいあてはまりますか。最もあてはまる番号を○で囲んでください。」(5件法)

- (1) 業務を工夫してより効果的に進められる
- (2) 他者や他部門の業務内容を尊重して仕事ができる
- (3) 初めて組む相手ともうまく仕事を進められる
- (4) より大きな視点から状況を捉えることができる
- (5) 以前の自分を冷静に振り返ることができる
- (6) 仕事をする上で、精神的に打たれ強くなっている
- (7) 苦手だった業務を円滑に進められる
- (8) 他者や他部門の立場を考えて仕事ができる
- (9) 複数の部門と調整しながら仕事を進められる
- (10) 多様な観点から考えて仕事ができる
- (11) 自分のマイナス面を素直に受け入れることができる
- (12) 仕事をする上で、精神的なストレスに強くなっている
- (13) 仕事の進め方のコツをつかんでいる
- (14) 他者や他部門の意見を受け入れて仕事ができる

本研究では、6つの下位尺度を潜在因子とした、高次因子「能力向上」の得点を仮定し、全項目の得点を加算平均し分析を行った。 $\alpha=.88$

【出典】

中原淳(2010). 職場学習論ー仕事の学びを科学するー 東京大学出版会

館野泰一・中原淳(編)(2016). アクティブトランジションー働くためのウォーミングアップー 三省堂

プロジェクト組織

- 調査企画・分析：

溝上 慎一（学校法人桐蔭学園 理事長 桐蔭横浜大学 教授）

柏木 智子（立命館大学産業社会学部 教授）

知念 渉（神田外語大学グローバル・リベラルアーツ学部 准教授）

畑野 快（大阪公立大学国際基幹教育機構 准教授）

- 調査実施や事務管理等：

学校法人河合塾 教育研究開発部

赤塚 和繁

上野 達央

木山 さゆり

高井 靖雄

徳永 紗世

富沢 弘和

※五十音順

「学校と社会をつなぐ調査」最終成果報告書

2022年（令和4年）8月

編集・発行：溝上慎一・学校法人河合塾

〒225-8502 横浜市青葉区鉄町1614 学校法人桐蔭学園

TEL 045-971-1411（代表） E-mail mizokami@toin.ac.jp

〒160-0004 東京都新宿区四谷1-6-2 四谷グローバルスタディスクエア 5階

学校法人河合塾 教育研究開発部

TEL 03-6811-5531 E-mail kkt@kawai-juku.ac.jp

<http://www.kawai-juku.ac.jp/research/sch/>

*無断転載を禁じます。